心想

読者の浄財でAMDAが運営

ネパール子ども病院開設1年

来院者2万人超す

ネパール子ども病院が2日、開所1周年を迎えた。首都・カトマンズにしかなかった小児専門病院を南部の都市・ブトワルに、と毎日新聞社と毎日新聞社会事業団がキャンペーン。共感した読者の浄財を基に民間の国際医療救援団体、AMDA（アジア医師連絡協議会、本部・岡山市）が運営する。国の援助を一切受けないこの病院に、既に2万人を超す患者が来院した。医療費を払えない貧しい患者をどうするかなどの課題はあるが、これまで十分な医療を受けられなかった住民にとっては、「日本からの友情の病院」として身近な存在になってきたようだ。間もなく始まる新生児医療を学ぶため来日中の看護婦長、スルチ・パラジュリさん（28）に病院の現状などを聞いた。【藤原 健】

友情の懸け橋 身近に

看護婦長 パラジュリさんに聞く

ネパール子ども病院

故人となった日本人医師と現在の院長、ポカレル医師の2人が構想。これに協力して1996年、毎日新聞社と毎日新聞社会事業団が「明日を生きたい――ヒマラヤのふもとから」のキャンペーンを展開。乳幼児の死亡率が日本の20倍のネパールに子ども病院を、と呼びかけ、建築家、安藤忠雄さんが病院の設計を引き受けるなど善意の輪が広がり、昨年11月2日、50床の病院としてオープンした。

患者の医療費が課題

――医療費は。

◆診察は15ルピー（1ルピー約2円）。レントゲンが100ルピーで、各種の検査が15～200ルピー。入院は1泊50ルピーですが、ブトワルとその周辺は貧しい地域で、入院患者の25％はお金を払えない状況です。こうした人たちをどうするか、が今後の大きな課題の一つ。

――病院にとって大切な電気や水は。

◆停電は1日に数回。日本からの医師が医療機器用の自家発電機を持ち込んでくれているので大丈夫ですが、病院全体の自家発電はまだ。扇風機が突然止まり、入院患者が困ることも。水は病院敷地で井戸を掘りましたが、水源がないらしく、離れたところからパイプラインで運び、タンクに備蓄しています。

――オープンして1年間の患者の病院に対する受け止め方は。

◆ネパールに二つ目の小児の専門病院で、日本人の協力でできた病院ということを、付近の住民はよく知っていました。みんな、「日本の病院」と呼んで、清潔な施設、最先端の医療を期待してやって来る人も多く、医師や看護婦、その他の医療スタッフもネパール人が主体という実態を見て戸惑う患者もいたんです。

「日本人が、ネパール人の自立のためにつくってくれた」と説明すると、納得してもらえますが。ともかく、期待が大きい。ネパールでの病院名は「シッダールタ（仏陀の名）女性と子どもの病院」。女性ならどんな症状でも診てもらえると勘違いして、診療科目にない内科や眼科などの相談に来る患者もいたりします。

〈ラメシュワル・ポカレル院長がまとめた診療実績によると、9月15日までの10カ月間に、2万1315人を診療。現在の診療科目は小児科、婦人科、小児外科。産科も近く設置予定。5月から入院治療も実施、221人が入院し、204人が退院した〉

〈ブトワルはインドとの国境に近くカトマンズからは空路で約40分。さらに車で1時間。地元の市当局や市商工会議所も資金援助などで協力を惜しんでいないが、カトマンズに偏重していた医療を施すには、不便なことが多い。カトマンズ以外の場所で医療に従事することはネパール人医師にとっては戸惑いもあるという。医師の数は固定しないのが現状だが、ネパール人看護スタッフ9人は1人も抜けることなく奮闘している。日本からはAMDAを窓口に、医師、看護婦が短期、長期の支援スタッフとして派遣されている〉

――看護婦のみなさんが頑張ってこられた要因は。

◆ブトワルで看護婦が1人でやっていくのは大変です。私の場合は、以前、日本で10カ月、看護の勉強をしたことがあり、医師の夫と一緒に赴任できたことが大きい。他のメンバーも3人がブトワル近くの出身だし、ネパール東部のダマックにAMDAが開いている病院で学んだ人も3人。病院の成り立ちをよく理解していることや、日本人との交流に比較的慣れた人たちが多いので続けてこられたのかも。日本から来る支援の医師や看護婦も慣れない環境で頑張っていますし。

――これから整備するべきことも多い。

◆病院施設の一部が未着工で、現状では手狭です。入院患者のための個室もありません。よりよき医療が目標ですから、日本のスタッフと協力を重ねながら頑張っていきたいと思います。そして、より多くの日本人に私たちの姿を見てもらいたい。これまでの日本の方々の支援には本当に感謝していますし、今回、私を日本に招いて下さったのも神戸須磨ロータリークラブの尽力。今後もみなさんに力を貸してほしいのです。